

認知言語学

眞田 敬介

2018年も認知言語学を枠組みとする書籍や論文が多く出版・公表されたが、その中で「2018年度の認知言語学の研究動向」として何に注目すべきであろうか。無論その答えは回答者の考え方等によって様々あり得るが、本稿では「認知言語学とは何か、どのような問題をなぜ扱うのか」を整理し問い直す動きを取り上げたい。

そうした動きを示す書籍として、高橋英光・野村益寛・森雄一（編）『認知言語学とは何か—あの先生に聞いてみよう』（くろしお出版）に触れないわけにはいかない。本書ではまず、認知言語学における「認知」の意味合い（第1章）や、認知言語学の文法観・意味観の独自性（第2・3章）といった認知言語学の根本を改めて問いかける。その後、伝統的に語用論で扱われた現象を認知言語学がどう扱えるかを整理し（第4章）、認知言語学の研究で注目を浴びて久しい現象（レトリック、文法化：第5・6章）や道具立て（コーパス：第7章）と認知言語学の関わりや発想を問い直す。その後、「言語普遍性や個別言語の特殊性」「言語習得・進化」「ヒトの認知」といったより大きな問題に対する認知言語学の立場を俯瞰し（第8～10章）、最後に、認知言語学がとりうる（とるべき）方向性を論じる（第11章）。こうした「認知言語学に対して多くの人が持ちうる疑問」を考えながら読み進めることで、認知言語学の根本を問い直すことができる。

早瀬尚子（編）『言語の認知とコミュニケーション—意味論・語用論、認知言語学、社会言語学』（開拓社）は、認知言語学の諸理論（認知意味論、構文文法、ラネカーの認知文法）だけでなく、関連分野（語用論、言語文化研究、社会言語学）の基礎知識と最新動向をつかむのに有益である。これらの関連分野については認知言語学の関わりを意識しつつ読むこともできる。例えば、語用論を扱う第II部では、意味論と語用論の境界を追究する立場としての関連性理論と、両者の連続性を主張する認知言語学とを対比させることができる。また、第V部で言語文化研究と社会言語学の最新動向を学ぶことで、「使用依拠」を標榜する認知言語学研究の可能性をさらに広げることでもできよう。こうした他分野との相互関係を考慮に入れることも、認知言語学の根本的発想や扱う問題を相対的に捉え直す際に重要であることを本書は教えてくれる。

以上、ここでは改めて認知言語学の根本を整理し問い直す動きを2018年度の動向の1つとして概観したが、もちろん個別の理論や現象を扱う、注目すべき研究も多く出ている。ここでは、認知言語学による文法研究の広がりや可能性を示した西村義樹（編）「認知文法論I」（大修館書店）、及び事態把握や視点に基づき絵本や映画ポスターにおける日英語の表現と文化を論じた尾野治彦『「視点」の違いから見る日英語の表現と文化の比較』（開拓社）の2冊を挙げておきたい。

（札幌学院大学）